

入選

テーマ…未来のための今を生きる
「使命の未来を歩むために」

東京都・八王子学園八王子高等学校1年 瀬戸秀一

昨年12月、祖母が倒れた。祖母は生まれつき心臓が悪かったそうだが、そのことに気づいたのは70歳を過ぎてからで、母や伯父が説得してようやく心臓の手術に踏み切ったのだ。心臓の手術は成功したものの、血栓が脳の血流を遮断した。心臓手術3日後だ。

祖母が倒れた状態で発見されたのは、病室のベッドの脇だった。すぐさま別の病院に移され、血腫を取り除く手術が行われ、祖母は一命をとりとめた。しかし、左半身に大きな麻痺が残り、車椅子での生活を余儀なくされている。祖母は要介護5で、身体障害1級の障がい者となった。

私はいえ、高校受験が目の前に迫る中で、祖母の病室や病院の待合室で勉強した。家族で祖母の介護をしながらの受験勉強は、しんどいこともあったが、悔いは残っていない。

第一志望の高校には、合格を果たすことができなかった。病室で祖母に不合格だったことを伝えると、祖母は泣いた。

「ごめんね、秀ちゃん。私のせいだね」

もとより、志望校に合格できなかったのは祖母のせいではなく、その時点での自分の力が足りなかったからだ。しかし、幼いころから第一志望のその高校に憧れていた私のシヨックは大きく、いつ気持ちが晴れるのだろうと、高校生活には不安ばかりが募り、鬱々とした日々を過ごした。高校入学を控え、3月に行われた入学説明会のあと、生活指導の先生に思い切った相談してみた。私の抱えるハンディキャップのこと、何ができて、何を助けてほしいのか。

その先生はほほ笑みながら、しかし、はっきりとした口調で話してくれた。「今までやってこられたようにやってください」
急に目の前が開けた気がした。

祖母は退院後、私たちと一緒に暮らし始めた。ある日、祖母は私に言った。「秀ちゃんの気持ち分かるようになったよ」

私の右手には、生まれつき親指がなく、右腕には橈骨がない。そのため、左腕に比べて短く、内側に曲がっている。物心ついたころ、思いどおりに動かないと泣く私を、母はそっと抱き寄せて教えてくれた。

「みんなちがって、みんないい」

詩人・金子みすゞの「私と小鳥と鈴」の一節は、私の宝物の一つだ。

この夏休み、私は高校の語学研修の一環として20日間のアメリカホームステイに参加した。募集が発表されたとき、躊躇せず申し込んだ私に、両親は驚いた。なにしろ、小中学校時代、修学旅行やスキー教室等にも、必ず介助の先生が付き添ってくれ、「合理的配慮」のもとに学校生活を送ってきたからだ。

実際、ハンディキャップを持つ私にホストファミリーが見つかるのか、という根本的問題に直面し、苦悩した。

しかし、私には夢がある。

言語学者になって、世界中を旅すること。そして、世界の人と語り合い、心でつながることだ。私自身に挑戦する資格があるかどうか確かめるため、どうしてもホームステイに参加したかった。私のその気持ちを酌んで、祖母が後押しをしてくれた。

「秀ちゃん、行っておいで。お金の心配はいらない。全部私が出してあげるよ。それくらいしかしてあげられないから」

初めて訪れたアメリカで私が目にしたものは、あまりに壮大な自然と、それと同じくらい開かれた人々の心だった。多種多様な人々、人種も思想も、何もかも異なる人たちが暮らす国、アメリカ。対立と融合を繰り返しながらきたこの国は、いろいろな意味で、大きい。

「使命を自覚したとき、才能の芽は急速に伸びる」という。私には、まだ手探りだが、きっと私にしかできない何かがあると信じ、未来のその瞬間のために挑戦を続けたい。

両親の祈りの上に、祖母の真心の上に、そして、私を励ましてくださったすべての人の温かな心の上に生きる者として。